第十三章　實地授業「乘合自動車」

第一節　教材の選擇まで

國民學校の研究授業であるから、一二年の教材を選ぶことにした。一年と二年はどちらにしたものかと色々まよつたが、飛び入り授業としては、一年に自信が持てないので二年にきめた。二年の教材には「富士山」や「乘合自動車」を初め、如何にも特色のある新鮮な教材が澤山出てゐるので、いよいよ教材の選擇といふことになると、教材の特色に迷はされてきめかねた。自分の好みとしては、「鏡」の三の「おかあさん」が取扱つてみたいのであるが、二年の子供には少々程度の高い教材であるから、出張授業としては、これも又自信が持てないので斷念した。そこでこんどは、どの子供にも生活經驗のある文にしたいと考へ、この點から教材の選擇にかかつた。新教材では「神だな」や「新年」がそれである。このどれかにしたい。と心に決めてみると、あまりに季節はづれの感じがする。「神だな」や「新年」は年の暮が近づかないと味はひが出て來ない。色々思案の末、長文ではあるが「乘合自動車」を取扱ふことにした。峠越しに海を眺める景色などは、奈良の子供には經驗のない世界であるが、未知の世界が展開されて行くやうなこの文は、はるかなるものへのあこがれに似た感情を呼び起して、親しみと好奇心をそゝり、子供ながらにも鄕土的感情に於て文に接しられるやうに思つたからである。

第二節　指導案

初等科第二學年男女組讀方指導案

指導者　增田勳
期日　昭和十六年十一月十一日
所　當校清水學級

一　題目　乘合自動車

二　要旨　乘合自動車に乘つて、ホ町のをばさんのお家まで行つた時の途々の景色や、車内の様子を中心にあらはした生活文を味はふことにより、深まつて行く秋の自然に親しみを持

たせ、美しい國土に對する理解を深めると共に、鄉土化して讀みを深めることによつて、鄉土感情に培ひ、紀行的叙事文の讀解力を養ひ、併せて車內の禮法を知らせる。

三　教材の系統と關聯

系統としては卷一の「ハコニハ」、卷三の「川」「海」と連關する鄉土的色彩を持つた教材であるが、ヨイコドモ下の「ヱンソク」及び自然の觀察「秋の野」、ヱノホン四「ヱンソク」「秋の景色」と關聯して取扱ふ。

四　文章

1　文材意圖　鄉土に對する關心に培ひ、鄉土に對する親しさと鄉土感情を養ふために取材された教材であるが、表現は紀行文であり、車掌と車掌の挨拶や、おばあさんに席をゆづる場面等が生かしてあつて、公德の修練につとめられてゐる。

2　表現態度　自動車の進行に從つて、ありのまゝに見聞が叙述されてゐる。それ故かなり長い文であるが、少しも長さを感じなく、車窓の景色の展開と、乘客の變化に對する興味心が次々ににじみ出て、あこがれに似た親しさを起させてゐる。低學年の兒童の心理を上手に生かした感が深い。

3　表現的形相　かなり長い乘車であるが、景色の變化と、乘客の變化が先へ先へと讀書をそそり、希望とあこがれをこきまぜた感情を誘發し親しみを覺える。殊に自然の變化と美しさと、をば樣のお家に寄せる親睦の情がとけあつて、讀む者に自動車と共に進み、共に搖れてゐる自分を思はせ、親しさを覺えさす。

4　表現機構　本文は大きく別れると次のやうに特色づけることが出來る。

山村――松並木を通りぬけ、稻田を通り、牛の引く車をおひこし、學校の生徒にあふ。

峠――雨がはの木の枝がまどにとどきさうで、海が見える。

農村――女の子が乘り、川を渡り、をばさんが乘り、道の眞中ににはとりが出てゐる。ホ

町に着く。

5　表　現

山村

○松並木を通りぬけると――如何にも視界が急にひらけた明朗さを覺える。

稲をさかんにかり取つてゐました。――お使に行つてゐることを忘れて、何か遊んでゐるやうな心のひけめを感じてゐるやうな純情が讀みとられる。

○牛の引いてゐる車をおひこし
　ルツクサツクをせおつた……生徒さんが……乘りこむ　平和な山村の秋を思はせる。

峠

○道が……だんだんのぼりになつて
　自動車は……ぐんぐんのぼりました。　大きな音をたてガソリンのにほひを強く殘し、走る様が見えるやうである。

○木の枝が、まどにとどきさう
　車の中が、明かるい　黄色や、赤い木の葉――如何にも峠らしい感じがする。

○「海が見える。」――山と山との間に、――光つて…瞬間的な喜びの感情がよく出てゐる。

農村

○「さやうなら、さやうなら。」――平凡な言葉であるが、惜別の情がふる小さな手と共に搖れてゐる感じがする。

○めいめい左へよつて……通り
　おたがひに手をあげて…あいさつ　お互の言葉が通じあつてゐなくても、心と心がふれあふ瞬間である。

○小さい日の丸の旗がのぞいてゐました。――「どなたか親類の方が出征なされるのでなからうか。」子供心にも時局を憂ふ心持がつい頭を擡げてゐるのである。尊い生活感情である。

○私がわきへよつて席をあける……――自然に行はれる美しさが偲ばれる。

○「……出征する孫が……」　これだけで、ふろしきづつみからのぞいてゐた日の丸の旗をみて想像された自分を思ひかへし、お婆様と一緒にお見送りしたい感情が動いてゐる。

○にはとりが……道のまん中で……ゐさをひろつてゐました……　のどかな田園の風情である。

　おどろいて……右へ左へ逃げました。

○いうびんきよくの前で止りました。――こゝが町の中心地なのであらう。

○三郎さんが……笑ひながら走つて來ました。――親しさの感情がにじみ出てゐる。この浮べた笑ひこそ、儀禮的な挨拶を超越した親愛の情のあらはれである。

五　指導の重點

讀み方　會話の部分と他の文とに注意して讀みを指導し、文に變化を與へると共に、十分讀みになれさせて自動車の通り過ぎて行つた途順を明らかにし、長文讀解力を養ひ、深まる秋の自然の美しさを讀みとらせ、我が國土に對する親しみの情を培ふやうに導く。

話し方　挿畫を中心に觀察を發表させて、文と結びつけて讀解を深め、文を鄕土體驗と結び自由なる想像を導いて發表を促し、話し方を指導すると共に文に對する理解を深める。尙その間に次の言葉の發音・訛言に注意してその矯正につとめる。

きのふ　車　せおつた　見える　光つて　さやうなら　ふろしき

にはとり　ゑさ　ひろつて　おりる

アクセント　はし(橋)―ハシ　はし(箸)―ハシ　はし(端)―ハシ

書き方　「ことばのおけいこ」を中心に書寫練習を行ひながら、特に次の假名遣ひに留意してその習熟を圖る。新字・讀替字については、その書き方・讀み方を授ける。

海が見える　木が生える

答へますと　そろへてこぎました

ありがたう　ありがたく

新字　乘合(アイ)自動車　稻(イネ)　生徒(セイト)　友だち　元氣(ゲンキ)　結(ムス)びめ　席(セキ)　腰(コシ)　出征(シュツセイ)(セー)　孫(マゴ)

讀替字　松並木(ナミキ)　女(オンナ)(ジョ)　出征(シュツセイ)

注意すべき語句・語法

1　擬人的な語法「結びめから、小さな日の丸の旗がのぞいてゐました。」

2　副詞の用法に留意する。「さかん」「すれすれ」「まもなく」

實踐指導　鄕土の自然に對して關心を持つやうに導き、乘合自動車や自動車に乘つた時の經驗を文にあらはすやうに指導する。

六　指導の要領

1　十分讀みに徹し、鄕土化することによつて、文を具體化し、その理解を確にするやうにつとめる。

2　自動車の進行に從つて模型的に地圖化し、作業を通すことによつて學習を進めるやうに

する。

3　「ホ町」や「サ村」は鄉土に因んで具體的な名をつけ、親しみを持たせるやうにする。

七　時間配當（五時間）

第一時　全文の讀みの指導・全文の概觀・挿畫の觀察發表

第二時　全文の讀みの修練・地圖作業化・文の構想の考察・「ことばのおけいこ」の（一）の取扱

第三時　全文の讀みの修練・初めから二十一頁の一行までの深究

第四時　全文の讀みの修練・二十一頁二行から終までの深究

第五時　全文の總括的取扱・「ことばのおけいこ」の（二）（三）の取扱

八　準備

讀本掛圖、乘合自動車の寫眞又は兒童の寫生畫

第三時案

目的　前時の構想の研究を背景に、峠までの文を讀み深め、稔の秋の田園の情趣を讀みとらせると共に、黄に、赤に色づく峠の美しさを味はせて、自然觀照の態度を養ひ、文學的情趣に培ふ。

指導週程

1　前時の學習を復習する。

イ　「ことばのおけいこ」の（一）を中心に乘合自動車の通過した途を概觀させる。

ロ　文の構想について反省させる。

2　本時の學習目標を設定する。

3　本時分の讀みの修練を圖る。

イ　指名讀二三回

ロ　特に次の言葉の讀み方・書き方について指導する。

乘合自動車　松並木　稻　さかん　學校の生徒　木の枝

ハ　次の言葉は括弧の中の言葉にならないやうに注意する。

きのふ（キニヨー・キンニヨ）　車（クンマ・クーマ）　せおつた（ショツタ）

見える（メール）　光つて（シカツテ）

4　文の深究

イ　○松並木を通りぬけると
　　○稻をさかんにかり取つてゐました。
　　○牛の引いてゐる車をおひこし
　　○ルツクサツクをせおつた…生徒さんが乘りこみました。

ロ　ぐんぐんのぼりました。
　　木の枝が、まどにとどきさうで……
　　車の中が　明かるいほどで……
　　「海が見える」――山と山との間に光つてゐました。
　　靜かな稔りの秋である。どこまでも都塵から離れた清澄な平和境である。
　　如何にも、なつかしさに似たあこがれをそゝり、遠くへ自分を持ち去るやうな感情が切々と胸に迫つて、峠の持つ甘い哀愁と希望の感情が出てゐる。

5　本時の學習を味はひながら讀みを深める。

第三節　指導の實際

一　前時の學習の復習

1　「昨日はどんなお仕事をしましたか。」
　　○乘合自動車の通つた道を繪にかいて行きました。
　　○「ことばのおけいこ」の(一)を讀みました。

2　「さう、乘合自動車の通つた道を繪にかきましたね。今日はその繪を發表していただきませう。」　兒童の一人は學習帳を持つて前に出て行き、繪について發表する。
　　○こゝが松並木で、この人は稻をかつてゐられる所です。サ村まではこんなに曲つてゐると思ひました。こゝにバスの乘り場があつて、中學校の生徒さんが二人乘りこまれました。この邊から段々坂になつて行きます。黃色や、赤い木の葉のさし出てゐる所はこゝです。たうげはこゝで、海は右の方に見えます。こゝは女の子が乘つた所です。川にはきれいな水が流れてゐます。もうホ町は見えるやうになりました。かへりのバスとすれちがつた所からは遠くに汽車の通つてゐるのが見えます。こゝの停留所からおばあさんが乘りました。ホ町の入口には荒物屋があつて、呉服屋、藥屋、酒屋が並んでゐます。

酒屋の隣に郵便局があります。

「なかなか發表も上手ですし、繪もお上手ですね、手をたゝいてあげませう。」

「こゝはどこでしたね。」

○たうげです。

「この停留所からは誰が乘つて來ましたか。」

○ルツクサツクをせおつた中學校の生徒さんです。

「この子の村からサ村まではどのくらゐあるのでせう。」

○奈良から法華寺くらゐです。——先生、そんなにちかくありません。

○奈良から橿原神宮までくらゐだと思ひます。

3「この文はどんなに別けて考へた方がよかつたですか。」

○たうげまでと、たうげと、たうげをおりてからの三つに分けて考へた方がよろしい。

二　本時の學習目標の設定

「今日は峠から海の見える所までをしつかりお勉強しませう。」

「こゝまでをしつかり讀んで下さい。」

ハイ、ハイ。と子供達は手を擧げて讀書を求める。中等兒を中心に朗讀の指導に入る。あまり注意する程のこともなく、大抵の子供は讀めるやうである。ただルツクサツクをリツクサツクといふ子供がある。數回一緒に讀ませて指導する。

「皆、上手に讀めるやうになりましたが、峠までなら本を見ないでも、自動車の通つた道を發表することが出來ますか。」

三分の一餘は手を擧げたが尙不十分であるため、「思ひ浮んで來るやうに、しつかり讀んでみませう。」と注意して指名讀を尙續ける。

三　文の深究

「さあ、もう話が出來ませう。發表して下さい。」

殆んど全部の子供が手を上げて發表を求める。「この子はこゝで自動車に乘つたことにします。」と黑板の一方に丸を印して出發點を明らかにし、兒童の發表を中心に道程を板書する。登り道の所を「坂」といひ、登りつめた所を「峠」といふこと等を指導する。

板書

○
←松並木　（美しい　氣持がよい　出ると明かるくぱつとする）
←稻をかるたんぼ
←しばらく行くと
←牛の引いてゐる車
←ルツクサツクの中學生
←（サ村の入口）
←山道（坂）

兩がは　さし出た木の枝
黃色や、赤　車の中が明かるい　（秋らしい景色）

峠

「海が見える」
光つて見える。
（繪にかきたい。
そこで止つてほしい。

「皆さんはこの峠までで、私も乘つて通りたいなあ。と思つた所はありませんか。」
殆んど總べての子供が手を擧げる。
○稻をかつてゐるたんぼの中を乘りたいです。（男）
○松並木の中を通りぬけたいです。（女）
「ハイ、さうです。私もです。」大勢の者が贊意をあらはす。意外に思つたので、「どうしてそんなに松並木の中が通りたいのですか。」と尋ねると、「美しいから、氣持がよいから、出た時は明かるくぱつとするからです。」等といふ。最もだと感じさゝれた。
「先生はもつと乘つてみたい所がありますか。」
○牛の引いてゐる車をおひこしたいです。（男）
○僕もです。追ひこすと氣持がよいからです。
「峠までにはまだ〳〵美しい所があるではありませんか。」
こゝまで問を進めないと、峠の紅葉する美しさに關心を持たないのに少々反省さゝれる。
○兩側から窓にとどく程黃色や赤い木の枝のさし出た山道が通りたい。

しかしけつして山の美しさがわからないのではなかつた。他の興味にひきづられてゐたのであつて、この問がもとになつて、次々に發表は展開して行く。

「山道の樣子はどんなでしたね。」

○黃色や、赤い木の枝が兩側からさし出てゐます。

○通つてゐる自動車の窓にとゞきさうになります。

○車の中が木の葉の色で明かるくなります。

子供の發表にしたがひ、前にかゝげたやうに板書して行く。

「『さし出た木の枝が、』とありますが、『さし出る』とはどんなになつてゐるのですか。」

子供達はすぐ腕をさし出して手まねをする。兩側(丸机)からさし出させて、机の上のかぶさることを實際に見させる。

「どうです。山道はどんな感じがしますか。」

○秋らしいです。

「たうげに來て海の見えた時はどんなだつたですか。」(變な問方をしたと思ふ。)

○生徒さんが「海が見えた。」といひました。

「どうして『海が見えた』といつたのでせう。」

○急にあかるくなつて美しかつたからです。

○海が山と山との間に光つて見えたからです。

「皆さんはこゝをよんでどんなに思ひますか。」

○繪にかきたいと思ひます。

○自動車が止つてほしいと思ひます。

「こんなに美しく海を見たことがありますか。」

○奈良には海がありません。

皆一度大笑ひをする。(こゝで鐘がなる。)

四　本時の學習を反省し、味讀する

「今日は峠までのお勉强をしましたが、どうでしたか。」と輕く反問をしながら板書を中心に要點を讀みかへし、「秋らしい氣持をしつかり心に持つて今日の所を讀んでいただきませう。」といひながら、優等生に一讀させて終る。

第十四章　批評會

第一節　自己批正

授業が終ると先づ自己批正を行ふ。靜かに自分の意圖した所を思ひかへして、豫定したやうに授業が進行して行つたかどうかを反省するのである。どんなに兒童の發表を自然に導いて行つた授業であつても、壇上で自分の豫定と喰ひちがつて行つたものならば、その時の兒童の心の狀態と、自分の目的とを照合して反省しなければならない。

研究授業といふものは、どんなに自分で快哉を叫びたいやうな喜びの後に殘る授業でも、それぞれ見る人の立場によつて、色々に意味づけられるものであつて、批評のないといふことはない。從つて何といつても自ら恃む所のないやうなことでは、批評會の席に臨んで、居たたまらないものである。この場合反省して教案と授業の實際とが、あまり無理がなく進行してゐる時は、上乘の授業と思はなければならない。

自己批正の場合、注意しなければならないことは、自分の失敗だと思はれることに對して、何とか理由をつけたがることである。これは慎しみたい。失敗は失敗として端的に、自分の反省される所を發表して、批正を仰ぐやうにしたい。

第二節　批評會と授業者の態度

批評會に臨んでは、この研究授業を行ふまでの自分の努力と研究の方向とを端的に發表して、從順に批評を受けるやうにすべきである。研究授業を行ふ場合は、讀方教育についても、授業の實際についても、一通りの研究がつまれてゐるものであるから、同僚の批評が斷片的な思ひつきに聞えて、自分の意圖とした琴線に觸れないものたりなさを感じたり、批評して下さるような點については一通り反省もし、考察もして來てゐる感じがして、批評の一つ一つについて説明がしたく思へたり、時に反撥したく感じるものである。この態度も慎しまなければならない。

同僚の批評は、よしそれがどんなに小さいことであり、本時の意圖から遠く離れてゐること

であつても、十分受け入れて後、正すべきものは諄々と正して行くやうにしなければならない。

今、次に批評會に發表すべき要點を上げることにする。

1　今日の研究授業は、何を主題として計畫したかを明かにして、その研究授業の性格に對する理解を乞ふやうにする。

2　研究主題を方法的に如何に苦心したかを發表する。即ち授業の力點についての發表である。

3　研究主題とそれに對する方法的苦心が兒童に如何に影響されて來たかを明らかにして、本時の授業を學級全體の國語の發展と、傾向の二つの面から位置づけるやうにする。

4　本時の授業の實際について、自己批正を素直に發表する。

第三節　新しい首途

理數科の造詣深い先生方の批評の中には、時に文學を何と考へておいでになられるのだらう。と反問したいやうな點も無いではないが、組織された思考と、透徹した頭腦によつて、全く思ひも染めなかつた研究の方向を暗示して下さつたり、藝能科に趣味深い先生方は、偉大なる直觀力と感性とによつて、教授過程を超越した自己の性格から來る長所なり、短所に觸れた批評を下さることがある。讀方の研究授業、必ずしも國語の研究家でないと出來ないといふことはないのであつて、寧ろ第三者の言葉の中に百八十度の轉廻を指示して下さる場合が少くないのである。從つて、批評して下さつた先生方のお言葉は、批評者を選ばず、細大漏さず、一度は思索のもととし、研究の課題として、その日を轉機として無心にかへり、新しく出發しなほすことが大切である。

「あゝ、やれやれ。」こんな歎息が思ひなしでも、ほつと口に出るやうなことでは、折角の努力が無駄である。批評會の最後の瞬間は、新しい首途の第一歩でなければならない。永遠の研鑽」そこに人間なるが故の道のあることを忘れてはならない。

昭和十六年十二月二十日印刷
昭和十六年十二月廿五日發行

國民學校 私の國民科讀方の研究授業
【定價壹圓拾錢】

著作者 増田勳（マスダ イサオ）

發行兼印刷者 吉田信造
京都市三條廣道東

印刷所 からふね屋印刷所
京都市東山蓮花王門南

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版文化協會登錄番號第110167號

發行所 晃文社
京都市三條廣道東
振替東京七五四一五番

國民學校 私の國民科讀方の研究授業 奈良女高師訓導 增田勳著 定價一・七〇 送料〇・一〇

國民學校 私の國民科綴方の研究授業 奈良女高師訓導 緒方明吉著 定價一・七〇 送料〇・一〇

國民學校 私の國民科國史の研究授業 東京高師訓導 宮腰他一雄著 定價一・九〇 送料〇・一〇

國民學校 私の藝能科音樂の研究授業 北村久雄著 定價一・八〇 送料〇・一〇

國民學校 私の體錬科體操・武道の研究授業 廣島高師訓導 中尾勇著 定價一・六〇 送料〇・一〇

私の讀方研究授業 文部省圖書編纂室 秋田喜三郎著 定價一・五〇 送料〇・一〇

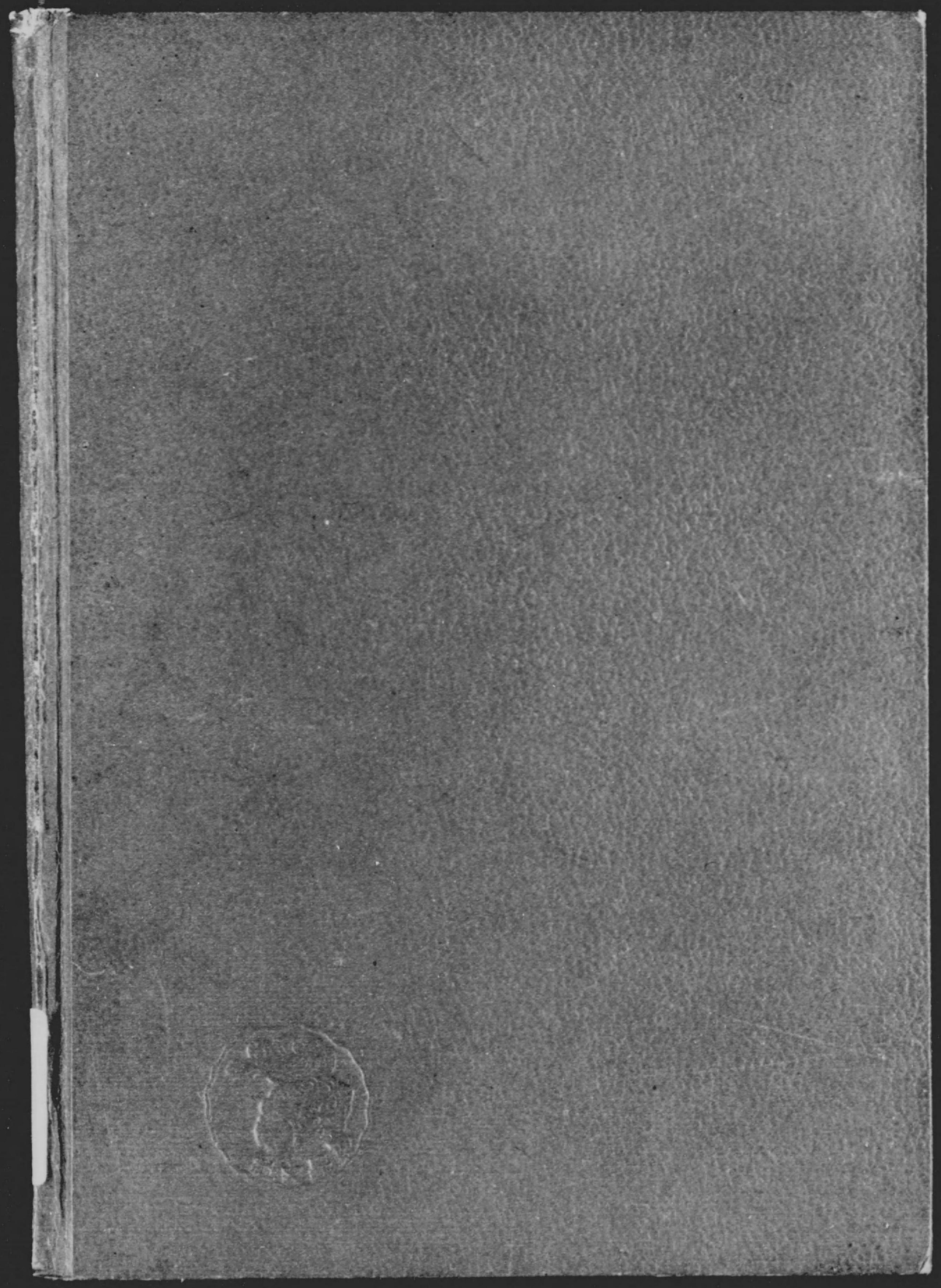
國民科讀方主任のために 文部省圖書編纂室 秋田喜三郎著 定價一・六〇 送料〇・一〇

皇民錬成 理數科算數指導方法論 奈良女高師訓導 池内房吉著 定價二・〇〇 送料〇・一〇

國民學校 初一の學級經營 奈良女高師訓導 池内房吉著 定價一・六〇 送料〇・一〇

國民學校 初二の學級經營 廣島高師訓導 桑原理助著 定價一・六〇 送料〇・一〇

學童隊訓練の構想と實際 奈良女高師訓導 增田勳著 定價一・六〇 送料〇・一〇

晃文社 發兌

263 • 2
6 0